

たものとなり、不気味さを感じさせないようになつてゐる。それは、現代の妖怪キャラクターが感情移入の対象となつてゐるためであり、江戸時代の人々にはない新たな妖怪との接し方であるといえる。

畏怖するにしろ、笑い飛ばすにしろ、かつて妖怪は人間とは根本的に異質なものとしてある一定の距離を置かれていた。これに対し、現代はむしろ人間、というより「私」自身のうちに妖怪を取り込もうとしていることを見ることができます。オカルトブームなどに見られるように、現実の閉塞感が、非現実の世界にプラスの価値を与えるようになつてゐる状況を、こうした現象は反映しているのかもしれない。

(かがわ・まさのぶ／兵庫県立歴史博物館)

シンポジウム／怪異・妖怪の世界

豚妖怪の伝承と伝播

田畠 千秋

1. はじめに

奄美、沖縄諸島では、豚、牛、山羊、馬など家畜の妖怪が夜の世界を跋扈してゐる。なかでも豚の妖怪は、耳切れ豚、首切れ豚、地まわり子豚、物を言う豚、杓子に化ける豚、人間に化ける白豚など種類も多い。

また、「豚の神は偉いので、悪いモノに会つた時は、豚を起こして鳴かせろ」などというのは、鶏鳴ならぬ豚鳴で厄災を祓う呪術である。豚に関する俗信も数多い。

ここでは、「美女に化ける豚」の口承説話としての伝承をはぐくむ背景を、奄美、沖縄の民俗生活（豚便所）の中に見いだし、また、その伝播の起源を古代中国（『搜神記』八巻本）にもとめ、時空間を大きく越えた口承文芸の伝承伝播の一例の提示としたい。

2. 美女に化ける豚

豚妖怪の中でも庄巻は「美女（美男も含む）に化ける豚」である。あらすじを個条書きにしてみると、

3. 豚が美女に化けて男に通う理由

①男の元へ美女が出入りする。
②傍でそれをみていた人に（その異臭によつて、またその履き物、鳴き声によつて）正体をあばかれる。
③奪つた草履が豚の爪になつてゐる。

④飼つていた古い豚の爪がなくなつてゐる。
⑤だから豚はあまり長く飼うものではない。

と、まとめることができる。ちなみに、「美男に化ける豚（豚媚入り型）」は、奄美諸島の特徴的な型で、沖縄地方にはあまり話されていない。ただ西表島の一部に、奄美型があるのはおもしろい。この「奄美型」は通い婚、あるいは夜這いの習俗の反映であろうか。

「美女に化ける豚」は「美男に化ける豚」よりも話としては未

成熟で、豚妖怪の域を出でていない。どちらかといふと沖縄型であり、最も特徴的なのは、沖縄地方でかつて盛んであった毛遊びを舞台としているところである。毛遊びは若い男女が昼間の労働の疲れをいやすため、夜、野原に集い、歌をかわしながら遊ぶ野遊びである。この話は毛遊びが盛んだったころに生まれ、伝播伝承されていったと思われる。沖縄地方に大変濃い伝承圈を有しており、かつては話の内容自体が世間話として信じられながら、うわさの情報網にのつて拡がつていったと考えられる。

さて、それではどうして奄美沖縄の豚が美女に化けて村の男と交わるのであろうか。その疑問に答えてくれるのが豚便所である。現在でも韓国濟州道の民俗村では、便所の下に黒豚を飼つているが、これは古代中国をはじめとした東アジアの一般的な養豚法である。もちろん我が奄美、沖縄も例外ではなく、豚はその家の人の便を食べて育つっていた。『南島雜話』を持ち出すまでもなく、近代に入つてからも奄美、沖縄の島々では、豚小屋はすなわち便所であつた。『石垣町誌』によると、石垣島では昭和九年に、「伝統的衛生習慣たりし便所兼豚舎」を衛生的観点から改善し、豚小屋と便所を分けるような行政指導があつたという。豚は、現在考えるよりもずっと、人間とは共同生活者としてのきずなが深いのである。

美女や美男に化けて人間と交わる豚の多くが、その家の豚（交わる相手はその家の息子や娘）であることの意味は、この家人と豚の結びつきを考えてはじめてわかることがある。なぜ豚が美女（美男）に化けてその家の息子（娘）と交わるかという謎を解くかぎは、誰にも見せたことのない成熟した秘所を、唯一どうどうと觀察していた豚の目にあるのである。豚は幼いときからずつと見ていたその家の息子（娘）が、成長したことを誰よりも早く確かに知つていたのであり、その息子（娘）を慕う気持ちが高じて、美女（美男）に化けて息子（娘）と交わつた

のである。当然、その家の息子（娘）とその家の豚という構図は、狭い意味で使っているのであり、これは、村の青年とその村の豚、という構図になり、一般的には「人間の秘所を常々見て育った豚」と「青年」というように、広く人と豚の関係に枠が広げられていくのである。だから遊女と化して金をかせぐ豚も出てくるのである。現代生活から想像する家畜としての豚よりも、かつての豚は人々の生活に密着して、生きてきたのである。もちろん、「美女に化ける豚」も、『搜神記』をはじめとする中国説話の影響のもとにあることは確かであり、ここでは伝承の基盤となる生活文化のことをいつているのである。

4. 中国『搜神記』の影響

『搜神記』八巻本（以下『八巻本』）に、「美女に化ける豚」が登場する。現代語訳でみてみよう。

李汾は越州上虞県の人で、山水の自然が好きであった。それで四明山に住んでいた。四明山のふもとに、張という百姓の屋敷があり、おおいに栄えて、豚をたくさん飼っていた。だがその豚を屠殺することなくかわいがっていた。永和年間の末、中秋の名月の時、李汾は月に誘われて庭に出、琴を弾いて一人楽しんでいた。すると外に人の気配がする。話しているような、笑つているような声である。李汾は何事だろうと近づいて、『夜ふけにこんな山の中の家にやつて来るのは、

一体どなたですか』と声をかけた。すると女の声で笑いながら、『あなたのすばらしい琴の音にひかれていました』と言う。李汾が門を開けて見ると、一人の絶世の美女がそこにいた。ただその女の口のあたりが少し黒みがかっていたようにおもえた。李汾はその娘子に、『あなたは仙女ではありませんか』と聞いた。女は、『いいえ、私はこの山のふもとの張家の娘です。今夜は父母が東の村に出かけましたので、忍んで参つてお目にかかったのです。どうぞ責めないで下さい』と言つた。李汾はたいそう喜んで、『あはら家ですが、どうぞお入り下さい』と娘子に言つた。娘子は部屋に入り、二人は談笑した。そのうち二人は帳をおろし、灯を消して情交を結んだ。とつせん一番鶏が暁を告げた。女は立ちあがつて別れを告げたが、李汾は恋慕して別れたくないなり、女の靴をとり、衣類籠の中に隠して、また寝入つた。女は泣いて靴を返しくれと頼み、『どうぞ靴をとらないで下さい。また今夕参りますから。もしそれをとられると、私の身はきっと死んでしまうでしょう。あなたにお願いします、どうかとらないで下さい』とうつたえたが、李汾は靴を返すことなく寝入つていた。女は泣きながら帰つて行つた。李汾が目覚めると、もう女はない。ただ寝台の下が血に染まつっていた。李汾は不思議に思つて、籠を開けてその靴を見ると、なんと豚の蹄となつていた。おそらくなつて、血のあとをたどつて山を下つて行くと、張さんの豚小屋にやつてきた。そして、その中の豚が李汾が

来たのを見て、目をいかせて吠えかかった。李汾はそれで事の一切を知り、そのことを張さんに話した。張さんはこのことを聞き、びっくりして、ついに豚を煮ることにした。李汾はそれでこの山居を去り、他所へ移り住むようになった。

これを整理してみると、

- ①やつてきた美女と交接した後、美女の履き物を隠す。
- ②美女が履き物を返してくれと懇願するが、男は返さない。
- ③美女は仕方なく夜のうちに帰つて行く。
- ④翌朝、男が昨夜の履き物を見ると豚の爪になつていてる。
- ⑤昨夜の美女は、実は豚の化けたものであつたと納得する

となる。

これは、奄美、沖縄の「美女に化ける豚」と内容がほとんど一致する。また、それだけでなく、奄美、沖縄の話の末尾につく教訓「だから豚は長く飼うものではない」という言い伝えも、この『八

卷本』では、「積年不宰而縱之」、「遂烹之」とあり、奄美、沖縄同様、

長く飼っていたために豚が化けたことを言つてゐる。これで「豚

を長く飼つていてはいけない」という俗信が古代中国以来の伝統であることがわかる。このように大事な要素のほとんどに重なり

があるため、『八卷本』説話と奄美、沖縄の説話は同話柄と認定してもよいと考えられる。それでは、唐末五代に撰されたと考

えられる『八卷本』の説話と、現代の奄美、沖縄で、伝説、昔話、世間話等々として話されている説話のこれほどの類似は、どのように説明されるのであろうか、全く互いに無関係に存在して

いるとは考えにくい。やはり中国説話の沖縄への伝播であろう。直接の伝播は、やはりこの『八卷本』を介してのことであろうが、民間における口承としての流布は、そう古くことではなく、明、清代に入つてからと考えた方が妥当であろう。

大会では、その他奄美、沖縄の夜に出没し、人々の股間をくぐつて命を奪う、「耳切れ豚」などの妖怪豚、また、豚に関する民俗（飼育、食生活、行事、祭祀、供犠、俗信等）をも発表したが、紙面の都合で載せることができない。以下の小論をあわせてみていただければ幸いである。

参考文献

田畑千秋「美女に化ける豚」『昔話伝説研究の展開』一九九五
三弥井書店

田畑千秋「豚妖怪の考察」『日本文化の深層と沖縄』一九九六
国際日本文化研究センタ

田畑千秋「『搜神記』説話にみる豚妖怪」『国語の研究』二三三
一九九六 大分大学国語国文学会

田畑千秋「奄美諸島における儀礼食の研究」『学術振興財団紀要』二〇〇一 アサヒビール学術振興財团

『奄美の民話』二 二〇〇一 奄美民話の会
(たばた・ちあき／大分大学)